

中国空軍の新型レーダー開発と早期警戒態勢の構築

漢和防務評論 20180706(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国空軍は、米軍による電子妨害、米軍のステルス機対処を主眼に各種レーダーを開発しているようです。

防空の自動化は一部完成し”中国版 LINK-16”が一部完成したとのこと。システム構築は、南京戦区と広州戦区が先行しているようです。

KDR モスクワ特電：

前便記事「中国空軍が大気圏外ミサイル迎撃実験を推進」において紹介した中国軍が建設中の弾道ミサイル迎撃システム及び防空早期警戒システムは、当然防空レーダー及び早期警戒機の開発と一体であり、同時にネットワーク化を図っている。実際のところ、中国は、これらの問題について長年取り組んできた。まず最初に、空軍の指揮システムの自動化であり、早い時期から白ロシアの支援を受けていた。

1960年代から、事実上、防空の指揮自動化を先行させた。この点は、NATOの方式と基本的に同じである。何度も行われた東南沿海地区での軍事演習の状況から見たことは、次のとおりである：まず第一に、防空部隊の自動化された指揮系統が逐次ネットワーク化されたことである。その後さらに空軍戦闘機と連携し指揮の自動化が進められた。KDRは、S-300型地対空ミサイルのレーダー部隊がSU-27/30戦闘機を誘導しているのを何度も発見した。これは当たり前のことである。なぜなら、S-300PMU-1のSENEZH-M1E型自動化指揮系統は、一度に3個大隊以上のS-300地対空ミサイル部隊を指揮することができるからである。また戦区の重要防護目標に接近する敵機に対して、同時に4機のSU-27/30を誘導することができる。

次に、湾岸戦争以来、中国空軍の自動化指揮系統は、防空レーダーの性能改善とネットワーク構築を目標にしてきた。防空レーダーは、C4ISRのS、R、I、CONTROL機能を構成する。KDRがすでに報道したが、中国空軍は最初に襄樊（湖北省）に近い地区に巨大なOTH-Bレーダーを建設した。次いで温州にHF-SWRレーダーを建設した。これらの事業は中国空軍のレーダー探知範囲を極めて大きくした。言い換えれば、C4ISRのSの搜索範囲を拡大したことになる。次に、新時代の、機動性があり、デジタル処理機能があり、長距離探知できるフェーズド・アレイ・レーダーを大いに発展させた。このレーダーは輸出も可能になった。

中国の新時代のレーダーとして次のレーダーがある：

- ①探知距離が400KMの、10秒間に400個の目標を同時に追跡できるSバンドAS-390型フェーズド・アレイ・レーダー（別名：JL3D-90A）
- ②機動式で、探知距離320KMのHGR-105 UHF低高度早期警戒レーダー

③探知距離 140KM の型海岸機動式 905A フェーズド・アレイ・レーダー

この他に開発したのは、

- ①さらに進歩した機動式、探知距離 200KM の LSS-1 型 2D 搜索レーダー
- ②探知距離 210KM の低高度 3D S バンド早期警戒レーダー
- ③探知距離 300KM の L バンド JH-12 低高度搜索レーダー
- ④探知距離 400KM の S/L バンド 440E 型 2D レーダー
- ⑤探知距離 330KM の HK-JM 型 VHF メートル波レーダー
- ⑥探知居地 450KM の S バンド JYL-1 型 3D 搜索レーダー
- ⑦探知距離 400KM の L バンド REL-3 型長距離レーダー等。

中国空軍がこのような多種類のレーダーを開発したことから、中国軍の自動化指揮系統、特に防空の自動化指揮系統が、電子妨害対処、ステルス航空機対処能力を高度に重視していることが分かる。同時に有線及び無線の両種のデジタル伝送系統によるネットワークを実現している。また同時に **KJ-2000**、**KJ-200/500** 早期警戒機（**AWACS and AEW&C**）を無錫に配備したことは、南京、広州戦区の防空自動化指揮系統を優先して整備発展させる意図があることを示し、陸上と機上の早期警戒レーダーをネットワークで結び、全戦区を一体化する意図が見える。現段階は、少なくとも、海軍、空軍、陸軍、ロケット軍の主力部隊がネットで結ばれている。すなわち”中国版 **LINK-16**”の一部が完成した。

以上